文学博士 吉海義則監修

大和物語新講

新釋 大和物語

吉澤義則監修

學生國文叢書 第九編

昭和二十七年一月十五日印刷
昭和二十七年一月二十日発行

大和物語新講
定価 百八拾円
送料 二十五円

監修 文学博士 吉澤義則
発行者 藤谷芳長
大阪市住吉区浜口町四一四
印刷者 岩岡書籍印刷株式会社

発行所 大阪市西区靱中通一丁目一四
株式会社 藤谷崇文館
電話住吉(67)二七一九番
振替大阪二七八五番

緒　言

本書は、日本文學の代表作品の一つである大和物語を解說し、その全文に對して懇切丁寧な通解と明確な語釋とを施したもので、大學及び高等學校の敎科用參考書として、又一般敎養書として著したものである。而して、これは、現今に於ける科學的研究の成果でもある。

さて、歌人が敎養者を代表してゐた頃の常用語として、「伊勢、古今、大和」といふのがあつた。それほどに、大和物語は重要視されて來たのであるが、適當な註釋書がなかつた。これ、本書を公にする所以である。

最初に解題をつけたのは、大和物語についての輪廓と、その研究の到達點とを明かにして置く方が、入り易いと思つたからで、まま私見を以てまとめた。讀後感と對照して戴き度い。

本文は、古くて確かなものによる事が、原作との距離が近いだけに、尊重される。その意味から、二條家系統の宗祇法師本を底本とし、あらゆる諸本を以て校合してそれを定めた。而して、章段を嚴密に分ち、句讀を正し、地と對話とを明かにして鉤を施し、歌は一行に記し、漢字には全部振假名をつけて、原作の趣を髣髴たらしめるに努めた。

一體、解釋學といふものは、さう安易なものではない。あらゆる語註を見て、それを集成するだけならば、誰にでも出來る。通行の一般註釋書は、大概それであるが、大きな缺陷も亦其所にある。註釋をするには、先づ用語それ自身の意義を明かにしなくてはならぬ。それには、用語例によつて、本義を究める必要がある。本義が確定して後はじめて文意に順應する場合もあり得る。これを逆に行つては失敗である。語義が明かでも、文脈を知らねば、內容がはつきりしない。特に、平安時代の作品については、さうである。これ對譯の必要なる所以。通解に當つては、すべて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

逐語的口譯を旨とし、時に意譯をもまじへ、原本の眞義に近からしめた。

語釋は、通解だけで十分でない語句や、特に表現樣式とか、詳說を要するものとかに限つて、簡明に記した。索引は、和歌と註語とについて、段と頁とを示し、後日の研究に資した。

本稿は、吉澤義則監修の下、西義一が筆を執り、こゝに成つた。大方の批正を賜はれば幸ひである。

昭和二十六年盛夏

著者識

目次

緒言……一
解題……一八
一、總説……一八
二、文章及び内容……一八
三、作者……二〇
四、書名……二一
五、後代に及ぼせる影響……二三
新講……二三
上之巻……二三
一、わかるれど……二三
二、故郷の……二四

三、千々の色に……二七
四、玉櫛笥……三〇
五、わびぬれば……三一
六、たぐへやる……三二
七、逢ふことは……三三
八、逢ふことの……三四
九、大かたの……三七
一〇、ふるさとを……三八
一一、すみの江の……三九
一二、あくといへば……四〇
一三、思ひきや……四一
一四、あらたまの……四三
一五、數ならぬ……四四
一六、春の野は……四五

目次

一七、秋風に……四六
一八、ふるさとと……四七
一九、世に経れど……四八
二〇、久かたの……四九
二一、柏木の……五〇
二二、あだ人の……五一
二三、せかなくに……五二
二四、日ぐらしに……五三
二五、主もなき……五四
二六、それをだに……五五
二七、今は我……五六
二八、朝霧の……五七
二九、女郎花……五九
三〇、沖の風……六〇

三一、よそながら……六〇
三二、あはれてふ……六一
三三、立ち寄らむ……六二
三四、色ぞとは……六三
三五、白雲の……六四
三六、呉竹の……六五
三七、かく咲ける……六六
三八、たまさかに……六六
三九、おく露の……六七
四〇、つつめども……六八
四一、いひつつも……六九
四二、里はいふ……七〇
四三、離する……七二
四四、登りゆく……七三

目次

四五、人の親の……七四
四六、うととけて……七六
四七、奥山に……七七
四八、大空を……七七
四九、行きて見ぬ……七八
五〇、雲ならで……七九
五一、おなじ枝を……八〇
五二、わたつ海の……八〇
五三、秋の野を……八一
五四、しをりして……八二
五五、今來むと……八三
五六、夕されば……八四
五七、をちこちの……八五
五八、みちのくの……八六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

五九、忘るやと……八九
六〇、君を思ひ……九〇
六一、世の中の……九一
六二、思ふてふ……九二
六三、さもこそは……九四
六四、わすらるな……九五
六五、玉すだれ……九六
六六、小夜更て……九九
六七、君を思ひ……九九
六八、我がやどを……一〇〇
六九、よひよひに……一〇一
七〇、みちのくの……一〇三
七一、咲きにほひ……一〇五
七二、池はなほ……一〇六

七三、別るべき……一〇七
七四、宿近く……一〇八
七五、君が行く……一〇八
七六、こよひこそ……一〇九
七七、永き夜を……一一〇
七八、うちつけに……一一一
七九、こりずまの……一一二
八〇、來て見れど……一一三
八一、忘れじと……一一四
八二、栗隈の……一一六
八三、思ふ人……一一六
八四、忘らるる……一一七
八五、よし思へ……一一八
八六、今日よりは……一一九

八七、山里に……一二〇
八八、紀のくにの……一二二
八九、これならぬ……一二三
九〇、明けぬとて……一二四
九一、高くとて……一二六
九二、ゆゆしとて……一二七
九三、物思ふと……一二九
九四、伊勢の海……一三〇
九五、なき人の……一三一
九六、白山に……一三三
九七、隱れにし……一三五
九八、ぬぐをのみ……一三六
九九、小倉山……一三七
一〇〇、散りぬれば……一三八

一〇一、悔しくぞ……一三九
一〇二、行く人は……一四一
一〇三、百敷の……一四二
一〇四、こひしさに……一五〇
一〇五、墨染の……一五一
一〇六、萩の葉の……一五五
一〇七、逢ふことの……一五九
一〇八、かりそめに……一六〇
一〇九、我が乗りし……一六一
一一〇、おほ空は……一六二
一一一、この世には……一六二
一一二、こち風は……一六三
一一三、むかしきて……一六四
一一四、袖をしも……一六六

一一五、秋の夜を……一六七
一一六、ながけくも……一六八
一一七、露しげみ……一六八
一一八、むかしより……一六九
一一九、からくして……一六九
一二〇、遅く疾く……一七一
一二一、笛たけの……一七三
一二二、逢ひ見ても……一七五
一二三、草の葉に……一七六
一二四、春の野に……一七七
一二五、かささぎの……一七八
一二六、我が宿の……一八〇
一二七、ぬばたまの……一八一
一二八、鹿の音は……一八三

一二九、人を待つ……一八四
一三〇、秋風の……一八五
一三一、春はただ……一八五
一三二、照る月を……一八六
一三三、思ふらむ……一八七
一三四、我にこそ……一八八
下の巻……一八九
一三五、飽かでのみ……一八九
一三六、薫物の……一九一
一三七、騒ぐなる……一九二
一三八、かりにのみ……一九三
一三九、隠れ沼の……一九四
一四〇、人をとく……一九五
一四一、敷きかへず……一九七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com